九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

研究ノート『源氏物語』と子供の死

大木，桃子
熊本学園大学非常勤講師

https://doi.org/10.15017/8952

出版情報：文獻探究. 44, pp.21-24, 2006-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

研究ノート

『源氏物語』と子供の死

大木桃子

『源氏物語』になぜ子供の死が出てこないのだろうか。この疑問を抱いたのは、五、六年ほど前病気で入院中、小康を得てベッドの上で『源氏物語』を読み始めたときのことである。悲哀に満ち満ちた物語であるにもかかわらず、『源氏』の登場人物はなんと恵まれ、均衡がとれていることか、経済的心配がないのは当然として、早世する子供がいないのはなぜだろう、当時は今より乳幼児の死亡率が高かったはずなのにと、ふと思ったのである。

主に中世歌謡にかかわってきた筆者にこの疑問を解決するすべがあるはずもなく、身近な研究仲間や、当時まだお元気でカルチャーセンターで講義なさっていた今井源衛先生にお尋ねしたりもしたが、明確な回答が得られなかった。以来ずっと気になっていながら答えを見出せないので、ここでまとまった形にし、物語研究者たちのご教示を賜りたいと思う次第である。

当時、子供の死が現実に多かったことを示すために、本来なら記録類を丹念に辿るべきであるが、とりあえず手軽に入手できる服藤早苗著『平安朝の母と子』（注1）を参照したい。次のような例がある。

・実資の妻が女子を産み翌年亡くなる。女子も正暦元（九九〇）年、六歳で死亡。（『小右記』）

・長保四（一〇〇二）年十月十六日、行成の妻が女子を産むがすぐ亡くなり、本人も産死。十三歳で結婚し、十四年に七人の子を産み、三人が早く亡くなった。（『権記』）

・寛弘七（一〇一〇）年六月十七日、故摂政伊尹の五女が乳母の子の寺で死亡。（『権記』・『御堂関白記』）

・万寿二（一〇二五）年正月十一日、頼通の妾が男子道房を産む。道房は早く亡くなる。（『左経記』）

また、下人の子らが事故や災害で死んだという悲惨な記事も記録類に散見するようだ。服藤氏は王朝時代に乳母が定着した理由として、子供の死亡率が高かったことを挙げる。母乳を与えている間はプロラクチンというホルモンが分泌され、乳汁の分泌を促すと同時に性腺の働きが抑制されて妊娠しにくい。このことを経験的に知っていて、特に天皇や摂関家の妻は妊娠を促すために乳母を雇って授乳から養育まで託したのであろう、と言うのだ。

日記文学の中にも子供の死は現れる。『土佐日記』に任国で子を亡くした悲しみがこう記される。

かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてにはかに失せにしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何事もいはず。京へ帰るに女子のなきのみぞ、悲しみ恋ふる。

京の家に辿り着いたときにも、ここで生まれた女子のいない喪失感が繰り返される。愛娘の死はこの作品の執筆動機の一つであり、作品の主調低音をなしているとも指摘されている。

『とはずがたり』巻一に、作者が後深草院の皇子を産んだことが見えるが、この子は満二歳を待たず夭折する。

さても、去年出で来給し御方、人知れず隆顕の営みぐさにておはせしが、この程、御悩みと聞くも、身のあやまちの行末、はかゞ〳〵しからじと思ひもあへず、神無月の初めの八日にや、時雨の雨そゝき、露とともに消え果て給ぬと聞けば、かねて思ひ設けにし事なれども、あへなくあさましき心の内、をろかならむや。

その後雪の曙と院への思いに揺れる心境が綴られ、少女時代に読んだ『西行が修行の記』に筆が及ぶ。皇子の死自体大きな扱いではないが、出家の意志が初めて明確に語られ、それが後半部の紀行文に繋がっていくことを思えば、自分で育てていない作者にとっても重みのあるできごとであったと見てよいであろう。

このように子供の死は日常的なものであり、かつ文学のテーマにもなり得るものであった。それなのに、『源氏物語』、いやそれのみならず、作り物語全般に子供の死が出てこないのはどうしてだろうか。

このことを考える上で、『夜の寝覚め』についての津島佑子氏の指摘に触れておかねばならない。八歳の息子が風呂場で溺死するという実体験を基に書かれた『夜の光に追われて』(注2)は、「私」から『寝覚め』作者に宛てた手紙と、散逸部分を補って現代風に蘇った物語とが二重奏を奏でて交錯するという構成になっている。辛い体験を打ち明ける相手に『寝覚め』作者を選んだ理由は、序章に当たる「手紙」で、妻のある男(息子の父親)を愛するようになったとき、顔を知らない女同士でも苦しかったのに、姉妹間での一人の男を巡る確執はどれほどであろうと思い、この物語に引き込まれていったからだと述べられている。心理描写に長けた『寝覚め』作者となら、女としての悲しみを分かち合えると思ったのだろうか。それはともかく、今回再読して「手紙」の部分に次のような記述があることに気付いた。

あなたにももしかしたら、子を失った経験があるのではないでしょうか。そのようにも、私は考えはじめています。なぜなら、あなたの物語には子どもの死が含まれていない。今の世では、子どもの死や他の過酷な死を、わざわざひとつの物語として語り聞かせなければならないほど、そうした死は日々の暮らしのなかで忘れられたものとなっています。一方、千年前のあなたの胸には、嘆きの深い子どもたちの死など日常のなかだけで、もうたくさん、という思いがあり、物語からあえて、そうした死はきれいさっぱり省いてしまったのではないでしょうか。

鋭い指摘である。このことは、『源氏』に当てはまるだろうか。宮崎大学の山田利博氏の調査(注3)に拠れば、『源氏』の死者は年立に出てくる主要人物だけで二十六人であり、他の平安時代の作り物語に比べ格段に多い。物語の扱う時間の長さにもよるだろうが、同等以上の時を扱う『宇津保物語』が半数以下であるので、やはり『源氏』の死者数は際立っており、死という負の要因が物語の展開上重要な役割を担っている、それを作者は方法として自覚していたのだ、と氏は指摘する。

『寝覚め』の死者は三人であるので子供の死が出てこないのは偶然であるとして、『源氏』の人の死が物語を動かすものとして方法化されているのに、端役まで視野に入れても子供の死が皆無なのはやはり意識的にはずされたと考えるのが妥当であろう。しかし、津島氏の言う「嘆きの深い子どもたちの死など日常のなかだけで、もうたくさん」という理由を持ってくると、嘆きが深ければ深いほど物語の展開には重要な役割を果たすはずなのになぜ、という疑問を拭い去ることができない。子供の死をきっかけに出家する女性が一人くらいいてもよさ

そうなものではないか。

そういう人物がいないわけではない。横川の僧都が助けた浮舟を献身的に介抱する僧都の妹尼である。浮舟を亡き娘によそえて看病するのである。しかし娘は死亡当時既に結婚していた。浮舟に心を寄せる中将が娘の婿である。死は四、五年前のことらしく、年齢を明らかにしていないが、今、尼君五十歳、中将二十七、八歳という設定からしておそらく二十歳くらいにはなっていただろう。

他にも逆縁はある。まず、山田氏をして「正に死ぬために物語に登場した」と言わしめる桐壺更衣。母親の嘆きは並々でなく、葬送のときは「同じ煙にのぼりなむ」と悲しみ、帝の遣いで来た靱負命婦にも生き残った悲しみを切々と訴える。しかし更衣も二十歳くらいだったと見られ、息子の源氏は三歳になっている。葵の上は夕霧を産んだ後亡くなる。父親の左大臣は「若く盛りの子に後れたてまつりてもこよふこと」と嘆き悲しむ。葵の上、当時二十六歳。さらに致仕大臣（頭中将）の子柏木が、女三宮との密通の件で源氏に皮肉を浴びせられたのをきっかけに懊悩を深め、衰弱死する。柏木、三十二、三歳。女三宮が薫を産んだ後である。ここでも両親の嘆きはひととおりでない。

逆縁があり、親の辛さが描かれながら、未成年の死が一例もなく、しかも端役の尼君の娘以外、子供を残しての死であるのが明らかであるという点は注目すべきである。作者は命の繋がりが途切れるのを恐れているかのようである。やはり子供の死を意図的に排除したのであろうか。確かにその形跡は見て取れるように思う。夕霧には雲井の雁と藤内侍（惟光の娘）の間に計十二人の子供がいる。

すべて十二人が中に、かたほなるなく、いとをかしげに、とりどりに生ひ出でたまける。（夕霧）

一人や二人早世の子や発達が不充分な子がいてもおかしくないのに全員がりっぱに成長しているのは珍しいという含みを持った表現である。『大鏡』巻五に、道長についてこれと似た記述があるのを見出した。

この殿の君達、おとこ・女あはせたてまつりて、十二人、かずのまゝにておはします。（中略）いさゝかかたほにてもどかれさせ給べきもおはしまさず、とりぐ〳〵に有識にめでたくおはしまさふも、たゞごと〴〵ならず、入道殿の御さいはひのいふかぎりなくおはしますなめり。さきぐ〳〵の殿ばらのきんだちおはせしかども、みなかくしもおもふさまにやはおはせし。

全ての子がりっぱに無事成長するのは難しいという認識があったことが補強されよう。

『大鏡』（昔物語）は、醍醐天皇の皇子雅明親王が十歳で没したことに関して、

あまり御かたちのひかるやうにし給しかば、山の神めでゝとりたてまつり給ひてしぞかし。

とも記す。「ひかる」と密接に関わる言葉に「ゆゆし」がある。母の死後、里に退出していた光源氏が久しぶりに参内したときの帝の感想。

いとど、この世のものならず、きよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしう思したり。

諸注釈書は「あまりに美しいものは鬼神に魅入られて天寿を全うしないという不安から」などと注す。容姿の整った子が夭折するという観念は当時一般的であったようだ。幼少時に「ゆゆし」と形容されるのは源氏以外に、冷泉帝、夕霧、薫ら八人ほどいる。源氏だけ二十六、七歳に及ぶまで繰り返し用いられるが、他は乳児からせいぜい十歳くらいまでである。

子供が常に死と隣り合わせにあるという感覚を持ちながら、あえて早世の子を描いていないのである。山田氏の指摘の如く人の死が『源氏物語』を動かしているのだとすれば、確かに年立に出てくるような重要人物が夭折すれば物語の展開上不都合が生じようが、大筋に関係のない端役にも未成年の死がないことにどうしても首をかしげざるを得ない。

四歳の愛娘をがんで失った悲しみを小説『永遠の子ども』（注4）などに書いている仏ナント大教授のフィリップ・フォレスト氏が来日したという記事が、二〇〇五年三月二日の朝日新聞夕刊に載った。比較部文学者である氏は娘の闘病中に大江健三郎の小説に出会い、父親の苦悩を見つめる文学があることを知ったそうである。近著に、同じく娘を亡くした『土佐日記』から、言葉は違っても中国と日本の月が同じであるように、人の心も同じではないかという箇所を引用したと言い、「文化や民族より人間の経験の普遍性の方が大きい。西欧では比較的新しい考えが、十世紀に書かれていたのを見つけ、我が意をえた感じです」と述べる。『永遠の子ども』の中で、子供を亡くした悲しみを描いたユーゴーやマラルメらの文学に言及する一方、漱石や一茶の作品にも影響を受け、近年、小説『ＳＡＲＩＮＡＧＡＲＡ』を著した。『おらが春』の一句から取った題名である。

一茶は五十歳を過ぎて結婚し、三男一女を儲けるが次々に夭折する。とりわけかわいがっていた長女さとの死を悲しんで書いた箇所は哀切を極める。

行く水のふたたび帰らず、散る花の梢に戻らぬくいごとなどと、あきらめ顔しても、思い切りがたきは恩愛のきづな也けり。

露の世は露の世ながらさりながら　一茶

我が子を亡くす体験は何によっても埋めがたく、受け入れ難く、古今東西を問わず文学のテーマとなり得るものであった。一女を育て、又『源氏物語』の中で子供をかわいらしく描写している紫式部がこのことに無頓着であったとはもちろん考えられない。繰り返しになるが子供の死は、たまたま書かれなかったのではなく、あえて書かなかったのである。文学の普遍的テーマが、端役も入れると四百五十人以上の人物が織り成す壮大な人間俯瞰図のモチーフの一つにも取り上げられなかった理由が、果たして、あまりにも痛ましくみごとに構築された美の世界を損ねるものとして省かれた、と言うようなことなのか、この方面の研究者の方々からのご意見をいただきたい。

注

（1）中公新書　一九九一年
（2）講談社　一九八六年
（3）西日本国語国文学会会報　平成十六年
（4）堀内ゆかり訳　集英社　二〇〇五年　原作は一九九七年出版

（おおき　ももこ・熊本学園大学非常勤講師）